
mader?

東雲咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

m a d e r ?

【Nコード】

N 5 6 9 5 J

【作者名】

東雲咲夜

【あらすじ】

街で暇をもてあましていた男がいました。

そんな彼を取り囲んだのは、数人の見知らぬ男たち。

その中に、昔の友人を見つけて用をたずねると……

SSです。

この日、俺は町でぶらぶらと暇をもてあましていた。

メルチエックなどをしてみたが、誰からも何の連絡もなく。買い物をしようかとも思ったが、特に必要なものもなく。

掲示板を覗いてみても、興味のない書き込みばかりで。

遊びにでもいかないかと何人かの友人に連絡したが、返事がないままだった。

だからといって、町を歩く人をナンパしてみるほど度胸もない俺。
「何か面白いことでもねーかな……」

こういうとき、かわいい女の子にでも話しかけられればいいのに。逆ナンみたいな感じでさ。

そんな俺の小さな願いは叶うはずもなく。俺の周りに集まってきたのは、数人の男たちだった。

俺はそいつらの顔を見てみたが、見覚えはない。ただ単に俺が忘れていただけかもなかったが。

「何……俺になんか用でもあんのか？」

ほんの少しの警戒を含ませてかけた問いに返ってきた返事は。

「お前さ、ケイ？」

Kっていったい何のことだ……と馬鹿みたいに一瞬考えてから、それは俺の名前だということに気が付いた。

自分の名前なんて普段意識していないから、なんだかわからなかったというわけだ。

「そうだけど……あんた誰？」

「おいおい——忘れたとはいわせないぞ？ ほら、オレだよオレ。カズヤだよ」

頭の中にある記憶と、今目の前にいるカズヤという名前と外見を照らし合わせてみる。

数秒後、俺の中で思い出したことがあった。たしか、ずいぶん前

に知り合ったやつのような気がする。

そのときのカズヤは、もっと弱い弱い外見だった気がするんだが、今日の前にいる男は、がっしりとしていて、随分と強そうに見える。

「ああ——お前か！ 随分と久しぶりだな。最近全然あつてなかったじゃん」

「お前の噂聞いたから、ちょっと出てきたんだよ」

「ふーん。それで、他の人たちは誰？」

「やっぱり覚えてないんだな……ユウジと、キョウヤと、シュンだよ」

再び記憶と照らし合わせてみるが、さっぱり覚えがない。なんというか、よくある名前でわからねえ。

過去にあったことはあるのかもしれないが、あまり仲がいいわけではなかったんじゃないだろうか。

男友達なんて、そんなもんだろ？

「うつかりしてただけだって。この俺様がダチのこと忘れるはずないじゃんか。で、用あんの？」

相変わらずだな、とケンジがぼやいていたが俺は見ない振りをした。

「まあ、用っていうほどのことじゃないんだけどな。ケンカしにきただけさ」

「ケンカあ？ おいおい、俺一人にお前達かよ。随分と卑怯じゃねえか」

「卑怯？ お前がいえる立場じゃないだろうに。こっちはずいぶんとストレスが溜まってるとんだよ」

カズヤと話している間にも、後の二人に俺は囲まれていた。

「で……殴り合いでもするわけ？ それなら大歓迎だけど」

俺がそういうと、近くにいるシュンってやつが鼻で笑いやがった。「殴り合いなんかじゃ、おれの気は済まない……」

少しイラついている様子のキョウヤがそういった。

「あいつらもそういつてるからさ……殺させてもらう」

そういう男たちは、腰元から剣を抜いて、俺に突きつけた。

「おいおい……マジかよ!？」

だいたい街中で剣だすとか禁止だろ!？」

そんなことを考えているうちに、ケンジの後ろで銃を構えている
ユウジが見えて、俺は慌てて駆け出した。

できうる限りの全速力で街から、男達から俺は逃げる。

いきなり刃物を振り回すなんて、正気じゃない。これから殺すな
んて宣言も。

でも、少し楽しいと思っっている俺も……イカれてるけどな。

にやりと口元を歪めながらも、俺は走り続ける。

俺は町から離れて、林へと逃げ込む。少しはまけたかと思ったが、
相変わらず銃撃は続いていた。

「前から、一回人殺したかったんだよなあ!！」

物騒なセリフと共に、カズヤが切り込んできて、俺はぎりぎり
で避けた。

追われるのは嫌いじゃないが、今の俺は丸腰だ。どうみたって勝
てやしない。

避けた勢いで、俺は木の根に引っかかって転んでしまった。

数メートル転がった俺が立ち上がろうとすると、すぐ側に剣が突
きたてられた。

「チエックメイト、だな……ケイ？」

そっぴいながら俺を見下ろすカズヤの顔には笑みが刻まれていて。
見ているだけで、いらいらしてくる。

二つの剣と、一つの銃が俺に狙いを定めていた。

「あー。ここで思いとどまったり……しないよなあ」

カズヤへ向けてというより、俺自身に向けてのボヤキ。

「当たり前だろ」

そして、嫌な音と共に俺の視界は暗転した――

暗転するときの残像が目に残って、チカチカした。

舌打ちをしながら俺はディスプレイをつけなおして、キーボードへと指を走らせた。

たったいま、俺を殺したばかりのやつらへと向けて。

『まったく……本当に殺してくれやがって』

メッセージを飛ばすと、カズヤからすぐに返事が返ってきた。

『元はといえば、お前が悪いんだから自業自得だろ』

『いつたい俺が何したってんだよ？』

『お前なあ……やっぱり変わってないな。散々オレのアイテムやら何やら持ってたおいて』

『ああ？ アレはお前から借りただけだろう』

『借りたら返すのが常識だろうが、アホ。最近見ないと思ってたのにな。キヨウヤ達から相談されてな』

まったく覚えていないが、どうやらあの男達から色々と盗んでいたらしい。

同じようなことを何度も繰り返してるから、覚えているはずがない。俺にとっては皆同じカモなんだから。

『だいたい、キャラ何か作っては消しだからいちいち覚えてないんだって』

『根っからの詐欺師みたいだよな、お前』

『悪かったなあ。俺はこういう奴なんだよ。で、カズヤはどうなんだよ感想』

『ん……ああ、PKの感想か。そうだな……お前に限ってなら、すかつとするかもしれないな』

『うつわ、この人殺し。サイテーなやつめ』

『お前にいわれたくはないって、この殺人鬼め。今までにいったい何人殺した？』

『さあ、な。覚えていられないくらい、たくさんってことだけは確かだぜ』

『そういえば……キヨウヤ達も喜んでた。やっと憂さ晴らしができたって』

『ったく今日はまんまとやられたからな……今度やりかえしてやるって言っとけ』

『いつまでたつても終わんなさそうだな……リアルでは、殺したりするなよ?』

『わかってるって。ってか、これって人殺しになんのかな』

『さあ……オレもさっきお前のこと殺したからなあ……何ともいえない。確かなのは』

『——イカレてる』

まったく同じ文字が画面に浮かび上がって、俺は苦笑した。

その後しばらく話をしてから、俺はPCの電源を切りディスプレイを外した。

ネットだろうがリアルだろうが……どちらにせよ俺はきっと人殺し——

（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

とあるオングをしているときに、ふっと思いついたものです。
ネタ発想の元になった方々には感謝を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5695j/>

mader?

2010年10月8日15時24分発行